

## - 3 - 1 単元「Lesson5 Alice and Humpty」 ( 柏崎市立松浜中学校 第1学年 )

### 1 単元指導計画

#### 1 - 1 単元名「Lesson5 Alice and Humpty」( 全8時間 )

担当者 野主 治子

#### 1 - 2 単元設定の理由

##### ( 1 ) 生徒の実態

生徒は、be動詞を含む文についてはI, you, this, thatを主語とするものを学習しており、am, are, isの使い分けや、疑問文・否定文の作り方を理解している。それらを用いて、自己紹介、聞き手のことを尋ねる、目に見える物を指し尋ねたり教えたりするという言語活動を行うことができる。しかし、それは、自分、聞き手、目の前にある物という狭い世界の物に対しての問答であり、目の前にいない第三者に対して代名詞he, sheを用いて説明したり尋ねたりすることはまだ経験していない。

また、疑問詞を含む文については、Lesson2でWhat is ~?、Lesson4でWhat do you ~? と Where is ~?を学習している。それらを用いて、物や場所について質問したり、その質問に答えたりする言語活動をしてきた。しかし、そのときに、be動詞を用いた疑問文と一般動詞を用いた疑問文の両方を学習したために、語順などの文構造に混乱を感じている生徒がいる。

本単元で学習する代名詞he, sheと疑問詞who, how manyについては、ふだんの授業の中で意図的に聴かせるようにしてきた。教師の質問に答える生徒がいることから、なんとなく意味を理解している生徒もいると思われるが、改めてこれらの学習を通して理解の定着を図りたい。

##### ( 2 ) 教師の願い

これまでに学習した主語が一人称と二人称のbe動詞の文に続いて、本単元では主語が三人称のbe動詞の文を学習する。そのことによって、これまで行った自己紹介に加えて、友達・家族・有名人などの第三者を紹介することが可能になる。また、これまでに学習した疑問詞whatとwhereに加えて、本単元ではwhoとhow manyを学習する。そのことによって、物や場所についての質問に加えて、人について「誰であるか」や「きょうだいや持ち物の数」など様々な質問を行うことが可能になる。

本単元の目標を達成するために、まずは、代名詞he, she 疑問詞who 疑問詞how manyと順を追って学習させる。

代名詞を学習する際には、これまで学習したbe動詞を用いた文I am ~. You are ~. This is ~.と関連させて、am, are, isの使い分けや疑問文・否定文の作り方を復習させ、確実に身に付けさせたい。

疑問詞を学習する際には、be動詞を用いた疑問文と一般動詞を用いた疑問文の構造の違いを復習させ、確実に身に付けさせたい。基本文型を用いた英文を聴く、モデル文を参考にした英文を書く、生徒同士でモデル文を参考にしながら対話をするなどの多様

な言語活動を通して、それらを身に付けさせていきたい。

最終的には、順を追って学習してきた代名詞と疑問詞のすべてを用いて、ペアでオリジナルの対話を発表できるようにさせたい。そうすることで、自然な流れの中での基本文型の使い方を理解し、楽しく表現できるようになると考える。

### 1 - 3 単元の目標

Lesson 5 の対話練習などを通じて、代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) の意味や使い方を理解し、それらを正しく用いて英文で表現できるようになる。

### 1 - 4 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度

代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) を含む文を用いて進んで対話しようとする。(話すこと、聞くこと)

本文を音読し、進んで発表しようとする。(読むこと)

表現の能力

代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) を含む英文を書くことができる。(書くこと)

強調する部分と発音に注意して音読することができる。(読むこと)

代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) を含む英文を用いて対話することができる。(話すこと)

理解の能力

英文を聴き、質問に正しく答えることができる。(聞くこと)

書かれた内容を正しく読み取ることができる。(読むこと)

知識・理解

基本的な語句や文の発音の仕方、アクセントの位置を理解する。(話すこと、読むこと)

代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) を含む英文の意味と構造を理解する。(書くこと)

### 1 - 5 学習過程と評価

学習活動	支援 (方法・内容)	評価規準				評価資料
		関心意欲態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解	
1 Section1の学習 (2時間) キーセンテンスを聴きhe、sheの使い方考える  英作文カードに第三者について説明する文を書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>一度話題に出た人物(三人称単数)についてhe(she)を用いるということを説明する。</li> <li>第三者についての説明をhe(she)を用いた英文で書かせる。</li> </ul>					カード1



<p>3 Section3の学習 (2時間)</p> <p>キーセンテンスを聴きhow manyを用いた疑問文の使い方を考える</p> <p>言語活動「誰のカバンか当てよう」を通してhow manyで始まる疑問文を用いて対話練習を行う。CDで本文を聴き、内容を想像する</p> <p>新出語句の発音と意味を確認する</p> <p>本文の内容を日本語に置き換える</p> <p>本文を音読する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「誰であるか」を尋ねるときにはHow many~?を用いるということを説明する。</li> <li>・学級の生徒にhow manyで始まる疑問文を用いて質問させる。</li> <li>・ピクチャーカードを見ながらCDを聴くよう指示する。</li> <li>・聴いた後、三択問題に答えさせる。</li> <li>・板書した単語に集中させ、発音の仕方に注意しながら大きな声で発音するように注意を促す。</li> <li>・本文のうちhow manyを含むものとその答えの計4文を日本語に置き換えさせる。</li> <li>・アクセントを強調したモデルリーディングの後に続いて読ませる。</li> <li>・ペアで音読練習させた後、発表させる。</li> </ul>					<p>言語活動の観察 カード5</p> <p>カード6</p> <p>カード6</p> <p>音読の発表の観察 音読の発表の観察</p>
<p>4 Lesson5のまとめ (2時間)</p> <p>Lesson5の文法事項についての練習問題に取り組む</p> <p>教師による学習した代名詞や疑問詞を含む対話を聴く モデル文を一部変更した対話文を書く</p> <p>ペアで対話の練習をする</p> <p>ペアで対話を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで学習した代名詞や疑問詞を含む文の意味と構造を整理するために練習問題に取り組ませる。時間は30分。</li> <li>・日本人教師とALTの対話のモデル文を聴かせる。</li> <li>・モデル文に習ってオリジナルの対話文をワークシートに書かせる。</li> <li>・前後の席の生徒同士でペアを組ませる。</li> <li>・アイコンタクトを取りながらペアで対話させる。</li> <li>・声の大きさ、アイコンタクトに注意し、発表させる。</li> </ul>					<p>カード7</p> <p>カード8</p> <p>発表の観察 発表の観察</p>

1 - 6 ルーブリック

学習活動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
				A ( 3 )	B ( 2 )	C ( 1 )
1 Section 1 の学習  英作文カードに第三者について説明する文を書く	表現の能力	he, she を用いた英文を書くことができる。	カード 1	He(She) is を含む英文を文法的にすべて正しく書いている。	He(She) is を含む英文の He(She) is の部分を正しく書いている。	He(She) is を用いた英文の代名詞の部分を書き正しくない。
CDで本文を聴き、内容を想像する	理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	カード 2	本文の内容に関する穴うめ問題の3問全問に正解している。	本文の内容に関する穴うめ問題のうち、2問に正解している。	本文の内容に関する穴うめ問題のうち、1問以内に正解している。
本文を読み、内容を把握する	理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	カード 2	be動詞を含む5文すべてを正しい日本文にしている。	be動詞を含む5文のうち3～4文を正しい日本文にしている。	be動詞を含む5文のうち2文以内を正しい日本文にしている。
本文を音読する	知識・理解	基本的な語句や文の発音の仕方、アクセントの位置を理解する。	音読の発表の観察	正しい発音とアクセントですべての語句や文を音読している。	部分的に間違いはあるが、概してすべての語句や文を正しく音読している。	語句や文をほとんど音読することができない。
2 Section 2 の学習  whoで始まる疑問文を用いて「3-Hint-Quiz」をする	表現の能力	who を含む疑問文を書くことができる。	カード 3	who を含む英文を Who is を含めて文法的にすべて正しく書いている。	who を含む英文の Who is の部分を正しく書いている。	Who is を用いた英文を書き正しくない。
	関心・意欲・態度	whoを用いたクイズを発表したり、クイズに解答したりしようとする。	発表の観察	whoを用いたクイズの発表と解答のどちらもしている。	whoを用いたクイズを発表または解答している。	whoを用いたクイズの発表も解答もしていない。
CDで本文を聴き、内容を想像する	理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	カード 4	本文の内容に関する穴うめ問題の3問全問に正解している。	本文の内容に関する穴うめ問題のうち、2問に正解している。	本文の内容に関する穴うめ問題のうち、1問以内に正解している。
本文を読み、内容を把握する	理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	カード 4	be動詞か who を含む6文のうち5～6文を正しい日本文にしている。	be動詞か who を含む6文のうち3～4文を正しい日本文にしている。	be動詞か who を含む5文のうち2文以内を正しい日本文にしている。
本文を音読する	表現の能力	本文を強調する部分と発音に注意して音読できる。	音読の発表の観察	強調する部分と発音に注意し感情を込めて暗唱し、スピードがある。	強調する部分と発音に注意して音読している。	発音のみに注意して音読している。

	関心・意欲・態度	音読を進んで発表しようとする。	音読の発表の観察	進んで挙手をして音読の発表をしている。	指名されて音読の発表をしている。	音読の発表をしていない。
3 Section 3 の学習  言語活動「誰のカパンか当てよう」を通して how many で始まる疑問文を用いて対話練習を行う	表現の能力	how many を含む疑問文を用いて対話することができる。	言語活動の観察	How many ~s do you have? を含む英文を文法的にすべて正しく話している。	how many を含む英文の How many ~s の部分を正しくしている。	How many ~s の用法を用いることができない。
	関心・意欲・態度	how many を用いた対話練習に意欲的に取り組もうとする。	カード 5	パートナーに 10 問中 8 問以上質問し、答えを書いている。	パートナーに 5 ~ 7 問質問し、答えを書いている。	パートナーにした質問が 4 問以下である。
CD で本文を聴き、内容を想像する	理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	カード 6	本文の内容に関する三択問題の 3 問全問に正解している。	本文の内容に関する三択問題のうち、2 問に正解している。	本文の内容に関する三択問題のうち、1 問以内に正解している。
本文を読み、内容を把握する	理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	カード 6	how many を含むものとその答えの計 4 文のうちすべてを正しい日本語にしている。	how many を含むものとその答えの計 4 文のうち 2 ~ 3 文を正しい日本語にしている。	how many を含むものとその答えの計 4 文のうち 1 文以内を正しい日本語にしている。
本文を音読する	表現の能力	本文を強調する部分と発音に注意して音読できる。	音読の発表の観察	強調する部分と発音に注意し感情を込めて暗唱し、スピードがある。	強調する部分と発音に注意して音読している。	発音のみに注意して音読している。
	関心・意欲・態度	音読を進んで発表しようとする。	音読の発表の観察	進んで挙手をして音読の発表をしている。	指名されて音読の発表をしている。	音読の発表をしていない。
4 Lesson 5 のまとめ  Lesson 5 の文法事項についての練習問題に取り組む	知識・理解	代名詞 (he, she) や疑問詞 (who, how many) を含む英文の意味と構造を理解する。	カード 7	文法事項についての練習問題に 8 割以上正解している。	文法事項についての練習問題に 5 割以上 8 割未満正解している。	文法事項についての練習問題の正解が 5 割未満である。
ペアでインタビュー対話の練習をする	表現の能力	モデル文に習い he (she), who, how many を含む英文を書くことができる。	カード 8	he (she), who, how many を含む英文を完璧に書いている。	部分的に間違いはあるが he (she), who, how many を含む英文を書いている。	he (she), who, how many を含む英文のいずれかを書いていない。

ペアで対話を発表する	表現の能力	作った対話文を声の大きさに注意して発表できる。	発表の観察	声の大きさとアイコンタクトに注意しながら対話している。	声の大きさに注意しながら対話している。	声が小さく対話が聞き取れない。
	関心・意欲・態度	ペアで練習した対話を全体の前で発表しようとする。	発表の観察	進んで挙手をして対話を発表している。	指名されて対話を発表している。	対話を発表していない。

## 2 授業と評価の実践

### 2 - 1 指導と評価の一体化の実践

#### 学習活動 1 Section 1 の学習

##### ( 1 ) 指導・学習の過程

代名詞he(she)の導入場面である。教科書の登場人物の絵を英文で説明し、一度話題に出た人物について代名詞he(she)を用いるということに気づかせた。

##### 英作文カードに第三者について説明する文を書く ( 1 - 表現の能力 )

生徒はペアを作り、学習カードに描かれた人物 (教科書の登場人物、芸能人、漫画の登場人物など) について例にならってHe (She) is ~ . の文を含む文章を用いて、口頭でパートナーに説明した。説明後に、説明に用いた文章を書いた。

##### CDで本文を聴き、内容を想像する ( 1 - 理解の能力 )

本文の概要を捉えさせるために、本文の内容についての穴うめ問題 1 問と選択問題 2 問に答えさせた。CDで本文を 2 回流し、教科書を閉じて集中して聴き取るように指示した。

##### 本文の内容を日本語に置き換える ( 1 - 理解の能力 )

教科書の内容を正確に捉えさせるために、教科書本文の全 6 文のうち、be動詞を含む 5 文を和訳させた。

##### 本文を音読する ( 1 - 知識・理解 )

アクセントを強調したモデルリーディングを聴かせ、それに近い発音になるように練習し、発表するという活動であった。各自の教科書にアクセントの印をつけさせ、アクセントを意識して練習するように促した。

##### ( 2 ) 評価結果

授業終了後に学習カードを、授業中の音読発表を資料として評価した結果、次のようになった。

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
表現の能力	he, sheを用いた英文を書くことができる。	13人	8人	1人
理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	10人	7人	5人
理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	15人	4人	3人
知識・理解	基本的な語句や文の発音の仕方、アクセントの位置を理解する。	6人	14人	2人

### (3) 指導の改善と実施

英作文については、He(She) is ~.を含む英文を文法的にすべて正しく書いた生徒は13人(59%)であった。学習カードに例を記載しておいたため、比較的簡単であったと考えられる。B評価になった8人(36%)のうち、冠詞のミスが7人、大・小文字のミスが1人であった。冠詞が必要な文についていなかったり、固有名詞の前につけていたりしたので、冠詞の使い方を再度指導した。

聴き取りについてはC評価が5人(23%)もいた。新出語のうちheとsheはすでに導入済みであり、littleとonはあえて導入しなくても意味を推測できると思われたため、新出語の導入をせずにCDを聴かせたことが原因の一つと考えられる。また、本単元以前に聴き取り問題をあまり行っていなかったためとも考えられる。新出語については、意味を推測する力もつけていきたいので、今後も推測可能と思われる語は聴き取り問題後に導入し、導入後に意味や発音を理解できたかどうかの確認を確実に行う。また、聴き取りの能力を高めるために、短時間でもいいので頻繁に聴き取りの活動を行っていきたい。

和訳についてはどの生徒も真剣に取り組み15人(68%)がA評価、4人(18%)がB評価であった。C評価の3人(14%)のうち2人は新出語の部分を正しく訳せなかったために5文中2文のみの正解であった。1人はほとんど和訳できなかったため個別指導が必要である。

音読については、全員が熱心に練習し、挙手して発表した。カタカナをふって読んだ生徒と、友達に教えてもらいながら音読発表した生徒の2人(9%)がC評価となった。「カタカナをふっても読めるようになりたい。みんなの前で発表したい。」という意欲が伝わってきた。今後、練習時にはカタカナをふっても、発表時には消して発表できるように指導した。

## 学習活動2 Section 2の学習

### (1) 指導・学習の過程

疑問詞whoの導入場面である。既習のwhatと対比して覚えられるように、物の一部を見せながらwhatを用いて質問した後、人の写真を一部見せ、whoを用いて質問し、



「誰であるか」を尋ねるときにはwhoを用いるということに気づかせた。

whoで始まる疑問文を用いて「この人は誰でしょう 3 - Hint - Quiz」をする(2 - 表現の能力、関心・意欲・態度)

人物を一人選び、その人についてThis is ~.Who is he(she)?の英文を用いたヒントを3つ出すクイズを書かせた。早くできた生徒には2~3問作らせた。その後、できたクイズを全体の前で発表させ、他の生徒が答えるという活動であった。

CDで本文を聴き、内容を想像する(2 - 理解の能力)

Section1と同様に、本文の概要を捉えさせるために内容についての穴うめ問題3問に答えさせた。新出語のegg, belt, tieは日本語になっているものばかりなので、今回も新出語の導入の前に聴き取り問題を行った。

本文の内容を日本語に置き換える(1 - 理解の能力)

本文の内容を正確に捉えさせるために、be動詞かwhoを含む6文を和訳させた。

本文を音読する(2 - 表現の能力、関心・意欲・態度)

ペアで役割分担をし、登場人物になりきって音読するという活動であった。Section1が説明文であったのに対しSection2は対話文であったので、暗唱し、感情を込めてジェスチャーつきで発表するように促した。

## (2) 評価結果

授業終了後に学習カードを、授業中に音読発表を資料として評価した結果、次のようになった。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
表現の能力	whoを含む疑問文を書くことができる。	10人	8人	4人
関心・意欲・態度	Whoを用いたクイズを発表したり、解答したりしようとする。	3人	9人	10人
理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	10人	8人	4人
理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	19人	1人	2人
表現の能力	本文を強調する部分と発音に注意して音読できる。	4人	17人	1人
関心・意欲・態度	音読を進んで発表しようとする。	21人	1人	0人

### ( 3 ) 指導の改善と実施

whoを含む英文を書き、B以上の評価になった生徒は18人(82%)であった。そのうち10人(45%)は文法的にすべて正しく書いていたが、8人(36%)はwho is以外の部分にミスがありB評価であった。大・小文字のミスが3人、クエスチョンマークなしが4人、主語のthis manのthisなしが1人であった。C評価の4人(18%)のうち3人はThis is ~.の文までは書いているのにWho is ~?の文が書けていなかった。1人は全く書けなかった。クイズの人物選びに時間がかかりすぎたことが原因の一つと考えられる。英文を書く能力はあるのに、内容で迷って書けない生徒が出ることを防ぐため、一人に一枚ずつ人物のカードを配り、その人についてクイズを作らせるなど課題の提示方法を工夫すべきだった。

クイズの発表と解答については発表した生徒が9人、解答をした生徒が6人であった。発表した生徒が9人しかいなかったのは時間不足が原因であった。発表させ、それを評価するからには十分な時間を確保する必要があった。また、解答した生徒が6人と発表者の数より少なかったのは、一人で何回も答える生徒がいたためであり、より多くの生徒に答えるチャンスを与える必要があった。その結果、発表も解答もしてA評価になった生徒は3人(14%)、発表か解答のどちらかをしてB評価になった生徒は9人(41%)であり、どちらもせずにC評価になった生徒が10人(45%)であった。

聴き取りについては、B評価以上が18人(81%)でSection1より1人増えた。これは、問題の難易度のせいでもあると思うが、生徒が聴き取りに慣れたせいでもあると考えられる。しかし、C評価の4人(18%)はSection1でもC評価であったため、答えを確認する段階でどこに注意して聴けば良いのかを強調させて聴かせた。

和訳については英文がSection1より短くて訳しやすかったせいもあり19人(86%)がA評価であった。

音読発表については1人以外は暗唱して発表した。そのうち、4人(18%)が発音とアクセントに注意して感情を込めて音読し、A評価となった。B評価になった生徒には、A評価との差は小さいので、さらにスピーディでなめらかに読めるように練習を重ねるように指導した。1人(5%)がカタカナをふって練習していたためC評価になった。この生徒はSection1でもカタカナをふっていたが、今回は発表時には暗唱していたので、今後はカタカナを消しても読めるようになると期待できる。また、「関心・意欲・態度」の面では1人(5%)がパートナーに促されて発表してB評価になったが、他は進んで挙手をして発表した。

## 学習活動3 Section3の学習

### ( 1 ) 指導・学習の過程

how manyで始まる疑問文の導入場面である。袋の中に入れた物の数を尋ねながら、数を尋ねるときにはhow manyを用いることに気づかせた。

言語活動「誰のカバンかを当てよう」を通してhow manyで始まる疑問文を用いて

対話練習をする（３ - 表現の能力、関心・意欲・態度）

ペアを組ませ、学習カードに書かれた持ち物や兄弟姉妹の数についてパートナーに尋ねるといった活動であった。

CDで本文を聴き、内容を想像する（２ - 理解の能力）

このページには長い文が多く、un-birthdayという聞き慣れない語があったことから、穴うめではなく三択問題にした。新出語はpresent, birthdayと日本語になっているものなので、今回も導入前に聴き取りを行った。

本文の内容を日本語に置き換える（１ - 理解の能力）

how manyを含む文の内容を正確に捉えさせるため、本文の全８文のうち、how manyを含むものとその答えの４文を和訳させた。

本文を音読する（２ - 表現の能力、関心・意欲・態度）

ペアで役割分担をし、登場人物になりきって音読するという活動であった。Section 2より１文ずつが長くなっているため、発展させずに同じやり方で行った。

## （２）評価結果

授業終了後に学習カードを、授業中に音読発表を資料として評価した結果、次のようになった。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
表現の能力	How manyを含む疑問文を用いて対話することができる。	19人	2人	1人
関心・意欲・態度	How manyを用いた対話練習に意欲的に取り組もうとする。	17人	4人	1人
理解の能力	本文の内容に関する質問に答えることができる。	14人	7人	2人
理解の能力	本文の内容を読み取ることができる。	13人	5人	5人
表現の能力	本文を強調する部分と発音に注意して音読できる。	10人	12人	1人
関心・意欲・態度	音読を進んで発表しようとする。	23人	0人	0人

人数の総数が違うのは、欠席者がいたため

## （３）指導の改善と実施

how manyを用いた対話はパターンが決まっていたため19人（86%）がA評価であった。How many ~ sの部分のみが言え、その後のdo you haveが言えなかったためB評価になった生徒が2人（9%）、全く言えなかった生徒が1人（5%）であった。しかし、C評価の生徒もパートナーに教えてもらいながら活動に取り組んでいた。

聴き取りについてはA評価が14人(61%)とSection2より4人増え、C評価が2人(9%)とSection2より2人減った。穴うめ問題から三択問題に変えたため難易度が下がったことが原因と考えられる。また、生徒が聴き取り問題に慣れたためとも考えられる。しかし、和訳についてはA評価が13人(57%)と6人減り、C評価が5人(22%)と3人増えた。これは1文の長さがすべて長かったためであると考えられる。動詞など一部の語を訳していない部分的な間違いが多かったので、正確な訳し方を指導した。

音読については、A評価の生徒が10人(43%)とSection2より6人増えた。ペアでの音読練習に慣れたせいもあり、意欲的に練習し、Section2よりスピーディな読み方ができるようになった。カタカナをふりC評価の生徒1人(5%)は今回も同様だったので継続して指導する必要がある。今回は全員が挙手して発表した。

#### 学習活動4 Lesson5のまとめの学習

##### (1) 指導・学習の過程

本単元のまとめの学習活動である。文法事項についての定着をはかるため練習問題に取り組んだ後、表現力を高めるため対話文を作成し、ペアで発表するという活動であった。

##### Lesson5の文法事項についての練習問題に取り組む(4 - 知識・理解)

Lesson5で学習した文法事項について定着をはかるため、練習問題に取り組ませた。内容は、代名詞の使い方を理解し、正しく書く力を見るために括弧内にheかsheを記入させる問題、疑問詞を含む文とその答えの文の構造を理解しているかどうかを見るための語順整序問題、代名詞と疑問詞を含む文の意味を理解しているかどうかを見るための和訳問題であった。どの疑問詞を用いても文構造は同じであることに気づかせるため、本単元以前に学習したwhatとwhereの問題も出題した。全20問を30分で行い、教科書等を見ながらやっても良いことにした。

##### モデル文に習って対話文を書く(4 - 表現の能力)

he(she)、who、how manyを用いた文を含む対話を教師2人が例として演じ、例に習った対話文を書くという活動であった。

書いた対話文をペアで発表する(4 - 表現の能力、関心・意欲・態度)その後、ペアを組み、作成した対話文のうち一つを選び、演じる練習をした後に発表するという活動であった。

##### (2) 評価結果

授業終了後に学習カードを、授業中に対話の発表を資料として評価した結果、次のようになった。

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
知識・理解	he(she), who, how manyを含む文の意味と構造を理解する。	14人	5人	4人
表現の能力	モデル文に習いhe(she), who, how manyを含む文を書くことができる	6人	15人	1人
表現の能力	作った対話文を声の大きさに注意して発表できる。	6人	14人	2人
関心・意欲・ 態度	ペアで練習した対話を全体の前で発表しようとする。	20人	2人	0人

人数の総数が違うのは、欠席者がいたため

### (3) 指導の改善と実施

学習した文法事項の練習問題については14人(61%)が80点以上であり、A評価であった。多くの生徒が間違えた問題は、how manyを用いた文の語順整序と、いろいろな疑問詞を用いた文の和訳であったので、全員に対して次の授業時に説明をした。また、今回は教科書等を見ながら練習問題に取り組ませため、おおむね良い成績であった。今後、確実な定着をはかるために、同様の練習問題を繰り返し行っていきたい。

対話文の作成では、6人(27%)が3文とも完璧に書きA評価であった。B評価の生徒15人(68%)のうち、8人がHow many ~ sのsがなく、残りはHow manyを含む疑問文のdo you haveの部分なし、冠詞のミス、大・小文字のミス、つづりミスであった。C評価の1人(5%)はhow manyを用いた文を書いていなかったが、他の2文は書いていた。これらから、how manyを用いた文の定着が低いと思われるので、本単元の学習以後も意識的に口頭練習の機会を設けるなど、繰り返し学習させる必要があると思われる。

発表では、声の大きさに注意した上にアイコンタクトにも注意したA評価の生徒が6人(27%)いた。Section 1～3までの暗唱の発表に比べるとA評価が少なかった。今後、本文を音読発表させるときに一部を変えさせるなど、オリジナルの対話文の発表に慣れさせていく。「関心・意欲・態度」については、指名されて発表したペアは1組だけで、その2人(9%)がB評価になった。その2人は自信がなかったためか声が小さく「表現の能力」ではC評価になった。本文の暗唱では大きな声で発表する生徒なので、良いところをほめ、オリジナルの文でも自信をもって発表できるようにさせたい。

## 2 - 2 自己学習力の向上に向けた評価の工夫

本単元では、第1レベルの工夫として評価基準の提示と自己評価カードの活用を行った。

### (1) 評価基準の提示



どかかるため、その分学習に当てた方が良いのではないかと考えられた。そこで、生徒に意見を求めたところ18人(78%)が「自己評価カードがあって良かった」と答え、5人(22%)が「良い面も良くない面もあった」と答え、「良くなかった」と答えた生徒は0人であった。良かったと答えた生徒の感想は、「基準が分かるとやる気が出る」「何を学習すればいいの分かる」「その日の授業を振り返ることができる」であった。良くない点としては、「記入するのに時間がかかるので、感想を書く欄を減らした方がいい」ということであった。自己評価に困難を感じたときもあったが続けてほしいという好意的な意見がほとんどであった。

## 2 - 3 外部への説明責任に向けた評価の工夫

### (1) 単元の総括的評価結果

本単元における観点別の総括的評価は、「関心・意欲・態度」については学習活動2 - 、3 - 、4 - の総和で、「表現の能力」については学習活動2 - 、3 - 、4 - の総和で、「理解の能力」については学習活動1 - 、2 - 、3 - の総和で、「知識・理解」については学習活動1 - 、4 - の総和で行うことにした。その結果は、以下の通りである。

#### 関心・意欲・態度

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは21人、Bは2人、Cは0人であった。B以上は合計23人となる。このため、クラス全体としては100%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。

#### 表現の能力

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは8人、Bは14人、Cは1人であった。B以上は合計22人となる。このためクラス全体としては95%以上が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、表現の能力の育成は目標をほぼ達成したと判断できる。

#### 理解の能力

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは16人、Bは3人、Cは4人であった。B以上は合計19人となる。このため、クラス全体としては82%以上が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、理解の能力の育成は目標をほぼ達成したと判断できる。

#### 知識・理解

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは6人、Bは13人、Cは4人であった。B以上は合計19人となる。このため、クラス全体としては82%以上が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、知識・理解の

育成は目標をほぼ達成したと判断できる。

(2) 単元における個人内評価結果

次に、生徒A、生徒B、生徒Cの3人を事例にしながら、個人内評価の特質について検討する。そのために、まず、3人の生徒の<個人評価結果表>を紹介すると、次の通りである。

個人評価結果表

		学習活動1				学習活動2				学習活動3				学習活動4				評 定
生徒 A	関心意欲態度					2			<u>3</u>		<u>3</u>			3			<u>3</u>	A
	表現の能力	3			<u>3</u>			2		3			<u>3</u>		3	<u>3</u>		A
	理解の能力		3	<u>3</u>			3	<u>3</u>				<u>3</u>	3					A
	知識・理解				<u>3</u>										<u>3</u>			A
生徒 B	関心意欲態度					2			<u>3</u>		<u>2</u>			3			<u>3</u>	A
	表現の能力	2			<u>2</u>			2		3			<u>3</u>		2	<u>2</u>		B
	理解の能力		3	<u>2</u>			3	<u>3</u>				<u>3</u>	3					A
	知識・理解				<u>2</u>										<u>2</u>			B
生徒 C	関心意欲態度					3			<u>3</u>		<u>2</u>			3			<u>3</u>	A
	表現の能力	1			<u>2</u>			2		1			<u>2</u>		2	<u>2</u>		B
	理解の能力		1	<u>1</u>			1	<u>1</u>				<u>1</u>	1					C
	知識・理解				<u>1</u>										<u>1</u>			C

(注) 総括的評価(評定)に用いた評価結果には下線を付した。評定は総括的評価結果に基づき、Aは80%以上相当、Bは60~79%相当、Cは59%以下相当の達成状況を示している。

観点間経時的評価

生徒Aは学習活動1においては「表現の能力」「理解の能力」「知識・理解」ともに3という高い構造的な発達特質を示している。学習活動2では「理解の能力」は3を維持しつつも「表現の能力」は2へ下降する。しかし、「関心・意欲・態度」は2から3へと上昇している。学習活動3では「関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」はともに3、学習活動4においても「関心・意欲・態度」「表現の能力」「知識・理解」ともに3という高い発達特質を示している。このため、評定においても4観点ともにAとなっている。

なお、生徒Aのように4観点ともにAと高く安定した傾向を示す生徒は、他にクラスに3人いた。

生徒Bは、学習活動1では3つの観点ともにほぼ2であったが、学習活動2では「表現の能力」は2のままであるが、「関心・意欲・態度」は2から3へ上昇し、「理解の能力」も3に上昇したまま推移している。学習活動3においては、「表現の能力」は3へと上昇し、また「関心・意欲・態度」と「理解の能力」はともに3の水準を維



持している。しかし、学習活動4では「関心・意欲・態度」は3であるが、「表現の能力」と「知識・理解」は2の水準で学習を終了するという発達特質がみられる。学習活動4は単元のまとめであり、やや高度な活動であったためと考えられる。評定はA・B・A・Bであった。

なお、Bのような類似傾向を示す生徒は、他にクラスに4人いた。

生徒Cは、学習活動1では3つの観点とともに1という低い水準での構造的特質が見られる。しかし、学習活動2になると、「表現の能力」は2へと上昇し、「関心・意欲・態度」も3という高い発達特質を見せている。しかし、「理解の能力」は1のままである。このような発達傾向は学習活動3及び4においてもみられる。すなわち、学習活動3では、「関心・意欲・態度」はほぼ3であるが、「表現の能力」は2、「理解の能力」は1のままである。学習活動4においても、「関心・意欲・態度」は3、「表現の能力」は2、「知識・理解」は1という構造的な発達特質がみられる。評定は、A・B・C・Cであった。

なお、生徒Cのような4観点の構造的な発達特質を示す生徒は、他にクラスに1人いた。

#### 観点内経時的評価

「関心・意欲・態度」については、生徒Aは3 3 3という高い水準で安定した推移を見せ、評定はAであった。生徒Aと類似の発達傾向を示した生徒は他に13人いた。生徒Bは3 2 3というように一時下降が見られたが、その後上昇し評定はAであった。生徒Cも類似の発達傾向を示した。生徒Bと類似の発達傾向を示した生徒は生徒Cも含め他に5人いた。

「表現の能力」については、生徒Aは3 3 3という高い水準で安定した推移を見せ、評定はAであった。生徒Aと学習活動類似の発達傾向を示した生徒は他に1人いた。生徒Bは2 3 2というように上昇し高い水準の発達を見せながらも、学習のまとめの段階では下降し評定はBであった。生徒Bと類似の発達傾向を示した生徒は他に1人いた。生徒Cは2 2 2というように、2の水準のまま推移した。生徒Cと類似の発達傾向を示した生徒は他に2人いた。

「理解の能力」については、生徒Aは3 3 3という高い水準で安定した推移を見せ、評定はAであった。生徒Aと同様の発達傾向を示した生徒は他に9人いた。生徒Bは、2 3 3というように2から3へと伸びた高い水準のまま推移し、評定はAであった。生徒Bと類似の発達傾向を示した生徒は他に2人いた。生徒Cは1 1 1と低い水準のまま推移し、評定はCであった。生徒Cと類似の発達傾向を示した生徒は他に1人いた。

「知識・理解」については、生徒Aは3 3という高い水準で安定した推移を見せ、評定はAであった。生徒Aと類似の発達傾向を示した生徒は他に5人いた。生徒Bは2 2というように2のまま推移し、上昇が見られず、評定はBであった。生徒Bと類似の発達傾向を示した生徒は他に4人いた。生徒Cは1 1という低い水準のまま推移し、評定はCであった。生徒Cと類似の発達傾向を示した生徒は他に1人であった。